柴山村の研究と先生

芦刈政治

毎月一回の「中世文書研究会」が終わった後、渡辺先生から「今日も頼むよ」と、御自宅までお送りする役を仰せつかっていた。その車中で、短時間ながら、さまざまな話をされ、それが、願ってもない楽しみであった。

平成七年の後半ころ、大野郡千歳村柴山が車中の話題となった。先生が「古代・中世には海部郡の所管となっていることは、豊後国の歴史の謎のひとつだ」といわれるのである。「古文書でも出てこない限り、真相が明らかにはならないのでは」という私の言葉に、「それは期待できまい。けれども、大野川筋に国領が集まっていることをヒントとして考えれば、あるいは推論できないこともないかも知れない」と言われたのである。このときは、その言葉の重要性に気づかなかった。

翌年一月の例会のときであった。「芦刈君、柴山村を書いたので忌憚のない意見を述べてくれ」と原稿を渡された。先生の原稿を訂正することは、とうてい、出来ることではないと思いつつも、このまま、原稿をお返ししては失礼になるという複雑な気持ちで目を通させていただいた。国領毛井村・柴山村の関係を明快に論じられた玉稿であった。後簡では「先般の貴見を考慮し、加筆訂正を加えたのが、この原稿です。忌憚のない御叱正を」と述べられ、三十日に大野川筋の見学をしたいと併記されていた。端々のことを取り上げてくださったのである。汗顔のいたりであった。

三十日、約束のとおり、大野川筋を御案内した。寒風のすさぶ日であった。細長では対岸から三重・大野川合流点の地形を子細に御覧になり「やはり、予想通りだ。三重川口は段差があって、舟は遡行できない」と満足そうであった。次は目指す柴山である。柴山の一キロ川下から川渕に降りた。堤防を走りながら観察される。ついに先生を見失った。私が息せき切って目的地に着いたときは、先生は涼しいお顔であった。理論を実証するためには、愚論も考慮され、また、わずかな観察時間の経過さえ、もどかしさを感じるほど、学問に対してきびしく対処される先生のお姿を拝見したのである。

（大分県地方史研究会参与）